

# 牧水祭記念号



第119号

昭和36年9月5日  
発行所  
宮崎県東臼杵郡  
東郷村役場



若山牧先生

## 牧水祭に当りて

牧水顕彰会長 黒木松美

九月十七日は、牧水先生の第三十三周年に当ります。本年も「牧水祭」をいたしまして先生の遺業を讃えることといたしました。牧水先生の作品が我が国文学史上に燦然と輝いています。これは今更申すまでもなく、また日本人の日々の生活に偉大なうらおいを与えています。その功を俟たないところであります。

「若山牧水」の研究が深められ、さきに先生の愛弟子歌人、大悟法利雄氏の著「若山牧水」をはじめとして、宮崎大学の長嶺教授著「若山牧水」、横田正知氏著の「日本文学アルバム、若山牧水」更に極く最近、文学博士、日大教授、森脇一夫著の「近代短歌、人と作品、若山牧水」など、人間若山牧水とその作品に対する研究著書が、相ついで

発刊されています。歌碑も北は北海道から、南は鹿児島にいたる全国各地に建てられ、その数三十に垂んとしています。かく偉大なる歌人を生んだことによつて、本村は今や国文学上有名な地となつたのであります。このことは同郷の者にとつては得がたいほこりであり、また同時に責務の重大さを痛感させられるのであります。

## 作品

次の「山桜と富士」「桜の歌」は中学校の国語の教科書にのせられて、牧水の作品である。

### ○山桜と富士

天城山が火山であつたといふことは、きわめて当然なような話で、しかも、わたくしは、それを知らなかつた。その噴火口の跡が山の上にあつて、小さな池となり付近に青笹の茂つてゐるところから青笹の池ともいふ周囲が八町あるところから

八丁池とも呼ぶといふ話はない。温泉宿の付近は、もうそのころは、おおかた散つてゐたが、少し山を登つて行くと、まだまつ盛りであつた。そして、眼界の広まるにつれて、あちの谷間こちらの山腹と、例の

出たように咲き盛つた一本二本の花の樹木が、まつた数限りなく見渡された。東京のあたりに多い吉野桜などは、まず遠く望むとき

には、いかに近く見ると、花びらばかりが枝先に固まつていて、ともすれば気品に乏しい恨みをいだく。山

桜は、近寄つて見たところもまことによい。その薄紅色のみずみずしい若葉が、さながら、その花びらを守

るやうに、きおいたつてもまつてゐる。その中に、ただ

が、つつましやかに咲いてゐるのだ。雨によく、晴れ

の好きなのは、うららかな日ざしのもとに、この大木

の陰に立つて、その花を仰いだときである。わたくし

は、よく「咲きこもる」「咲きしずむ」といふこと

とばを使うが、それは、晴れた日に見るこの花の感じ

が、まつたくそれである。葉も日の影を吸ひ、花びら

もまた、春の日ざしに露けさるまで、その光、その

におい、その光、そのおき放つてゐるのである。いたづらに日光に照り返す

く、じゆうぶんにく、吉んで、そして、おのずと光りかかやうという趣がある。それが、この花を、少くも「咲きこもる」に輝かして、

「咲きこもる」は、おのずと出てくることなるのである。そうして、近くから仰

ぐもい、かかまた山の高みから、あちこちに咲き

盛つてゐるのを見渡すのも静かであり、一つ一つと

飛び飛びに咲いてゐるのがいかにこの花に似つかわ

しい。「海が見えだしました。」案内のひとりが言つた。

「静浦の海ですね。それおれ沼津の千本松原も見えま

す。」もうひとりが言う。と、もうひとつないかすみ

が、その入江、その松原を薄色に包んでゐた。

「お、富士。」わたくしは、思わず手を上げた。

「お、富士。」わたくしは、思わず手を上げた。ついで、

箱根の連山、その次が愛鷹山、それらの手前、

青東山、それらの手前、青東山、それらの手前、

中東山、それらの手前、中東山、それらの手前、

乙女峠から見た富士もよかつた。愛鷹の頂にはい登つて見た富士もよかつた。また遠く信州の浅間、飛騨の焼岳の頂上立つて、足も

とにわき上がる噴煙に心を取られながらも、はしなく

はらかな雲の波の上に抜きいでてゐる富士を見いでて

もあつた。が乙女、愛鷹はあまりに近く、慣れず

の感がないではない。焼岳、浅間山ではあまりに遠

く、ただ思いがけなく遠くみ見た心おどりが先だつた

ものともいふ。そういふ点において、富士を望み

仰ぐに、同じ山からする

には、この天城などが、最もあつた。この天城などが、

ではあるまいかと、おのずと思ひいだされたのであ

つた。ちようどまた、その日は、ほどよいかすみ、ふもと

の平野をこめていた。箱根の愛鷹の峰も、それに浮か

んでゐる形であつたが、富士は、まつとあつた。富士

は、まつとあつた。富士は、まつとあつた。富士は、まつとあつた。

二首ともわたくしの十八、九歳のころの作である。正直に幼いが、こどものかい

た絵を見るようなおもしろみがなくもない。前の一首

はらはらと散つて来る山桜千里余りを離れた延岡とい

う城下町の中学に出ていた知れぬ寂しさに襲われな

る夕暮れ、急に母が恋しくなつた。一心になつて母

のことを思つてゐると、その母の母の住む郷里の山

のけしきが目につかんでたのであつたらう。

## 牧水の歌とその鑑賞

文学博士、森脇一夫著「若山牧水」の中にその代表作が次のように鑑賞されてゐます。

幾山河越えざり行かば寂しさのはてなむ国ぞ今日も旅ゆく

幾つかの山河を越え越えしつたは、きつと寂しさのなつたは、きつと寂しさのなつたは、きつと寂しさのなつたは、

きつと寂しさのなつたは、きつと寂しさのなつたは、きつと寂しさのなつたは、きつと寂しさのなつたは、

### ○桜の歌

なにとなき寂しき覚え山さくら花ちるかげに日を仰ぎ見る  
行きつくせば浪青やかにうねりぬ山さくらなど咲きそめし町

